慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パフォーマティヴィティの基盤としての間身体的ナルシシズムの探求：バトラーによるメルロ＝ポンティ解釈への批判を通じて
Sub Title	Research on interbodily narcissism as the base of performativity : through criticizing Butler's interpretation on Merleau-Ponty's theories
Author	長野, 慎一(Nagano, Shin'ichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2020
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.25 (2020. 11) ,p.92- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20201120-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 25 号（2020）

パフォーマティヴィティの基盤としての間身体的ナルシシズムの探求

――バトラーによるメルロ＝ポンティ解釈への批判を通じて――

Research on Interbodily Narcissism as the Base of Performativity: Through Criticizing Butler ’s Interpretation on Merleau-Ponty’s Theories

長野　慎一

１．目的と方法

本研究の目的は、Ｊ．バトラーがいうパフォーマティヴィティの基盤に、M. メルロ＝ポンティがその身体論において言うところの間身体的ナルシシズムがあることを示すことである。そのための方法として、両者の主要概念を整理しつつ、バトラーによるメルロ＝ポンティ解釈の妥当性を検討する。まず、両者がデカルト的な心身二元論に対して異なる批判の方法論を採用していることを確認する（2 章）。次にメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』の身体概念に関するバトラーによる評価を整理する（3 章）。次いで、パフォーマティヴィティ概念にもとづくバトラーによる身体論が、身体の水準での自意識をうまく説明できなくなっていることを指摘する（4 章）。最後に、メルロ＝ポンティが『見えるものと見えないもの』で示した“間身体的ナルシシズム”をもとに、文化と権力の連関の中でいかに身体に自己知が生成するかを論じる（5 章）。

２．心身二元論に対する異なる方法論：現象学とパフォーマティヴィティ論

（１）心身二元体制に先立つ身体的実存

メルロ＝ポンティもバトラーも、認識と意志の主体としての精神とこれに対して受動的な位置を占める客体としての身体を措定する心身二元論を批判する。が、これを批判する方法論は異なっている。前者は、“知覚する身体”にこそデカルト（Descartes 1642=2006）のコギトの着想以来、「精神」という用語のもとに探求されてきた性質（認識と意志）を帰する可能性を探ることで、心身合一的な主体像の理論化に向かう。他方、後者は、権力関係の再生産に向けて配置された言語構造の相関物として、主 - 客図式によって分断される二元的領域が再生産されるとみなし、その結果として、どのような身体がコギト的主体性の剥奪、あるいは低減の根拠として社会的に配置されていくかを探る。本章では、二者の心身二元論批判を整理することに努める。続く２つの章では、メルロ＝ポンティがいう身体的実存に対するバトラーの評価を検討する。本章はそのための予備的考察にあたる。

メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』において、概念的思惟の源泉としての精神とも客観的

長野慎一「パフォーマティヴィティの基盤としての間身体的ナルシシズムの探求――バトラーによるメルロ＝ポンティ解釈への批判を通じて」『三田社会学』第 25 号（2020 年 11 月）92-105 頁

に実在する客体としての物質とも別の次元で、独自の活動領域で特異な感覚の構造を自らに生み出し物事を知ろうとする者として、知覚する身体を、概念化している。身体は他の身体や物から成る世界を、動き回ることで、探索し、その形成に関与する。その過程で身体には、「感覚的なものに意味をはらませる」「原初的働き」が現れる。「知覚」とは「感覚的なものに内在する意味を把握すること」の謂いである。そして、「知覚」は「判断」に先立つ作用であるとされる。「判断」とは「感覚がちりぢりばらばらに分散する可能性を抑え」、「真実の知覚を虚偽の知覚から区別する」作用であり、主知主義的理論が思惟の「反省」に見出してきた作用である。この理論に抗う形で、メルロ＝ポンティは、「感覚」として出現する身体の「知覚」に「意識」の基盤を見出すのである（Merleau-Ponty 1945=1982: 74-8, 84-5）。

さらに、『知覚の現象学』では、主体性の根幹に、知覚する身体の実存的経験が据えられる。メルロ＝ポンティが言うには、「私の主体性」は「私の実存」としてある。その実存とは「私がありたいと志向するものへの、力ずくの移行」のことであり、「身体を通じて世界のなかに入ってゆくことによってしか、その自己性」は「現実化されない」（Merleau-Ponty 1945=1982: 626, 674）。「志向する」とは、感覚に浮かび上がる意味を前提に、身体が行う「結果の先取り」や「把握」の活動である（Merleau-Ponty 1945＝1982: 194-8, 225-37）。つまり、“身体的な実存としての主体”は、身体の感覚を通じて、自己と世界の関係の意味を理解し、その関係に自己を介在させることで、ありたい自己の実現を図るのである。彼に言わせれば、デカルト的思惟やそれが対峙する身体は、そのような思惟を身体的実存が引き受けることによってしか発生しない（Merleau-Ponty 1945＝1982: 146, 662）。

（２）パフォーマティヴィティの結果としての心身二元体制

他方、バトラーは、パフォーマティヴィティ概念をもとに、いかに自己 - 同一的なものとしての主体と客体が社会的に構築されるかを理論化することに向かう。パフォーマティヴィティ概念に関する要約的説明がある『問題＝物質となる身体』にしたがえば、パフォーマティヴィティとは、既存の記号体系を反覆して引用することによって自己 - 同一的なものを指し示そうとする表現行為である。ある記号がそれに先立つ、あるいは外在する何かを指し示すと見なされる条件は、そのようなものとして位置づけを行う当の意味付与行為が、既存の記号体系からの適切な引用であることによる。つまり、記号が何かを正しく意味し指し示しているかは記号の外部にある実体によって担保されているのではない。確立した引用であることによって、その種の実体に裏付けられているのだとの了解が社会的に生じているのである（Butler 1993: 1-55）。この観点に立てば、客体としての身体は、記号を用いて確認されることを待つ事実として客観的領域に属するのではなく、特定の記号体系の枠組みの中で行われる引用によって、そのような領域に属するものとして意味づけられている限りで、その同一性が事実確認されうるのである（Butler 1993: 33-5）。

同時に、バトラーの分析では、引用による表現行為がそれを担う身体を語る主体へと仕立て

ていくとされる。すなわち、ある身体は、そこから発せられる言葉が言説の適切な引用である限りにおいて、自らを特定の客体として提示するがゆえに、やはり客体であるにもかかわらず、真理を認識しそれを言葉に変換する能力のある精神を己に宿す、特権的な身体とみなされていく[1]。例えば、同性愛の身体を異常な精神の客観的な証拠と位置づけるような異性愛主義的言説は、他者を非難する言葉としてそれを引用する身体を、正しい認識をもつ思惟を宿すそれとして位置づける。他方で、差別されるべき身体は、言説を正しく引用しようが、誤って引用しようが、そのような地位から排除される。例えば、先の言説の枠組みにおいては、精神の異常を証拠立てる客体として自己を定義する言葉を発する同性愛の身体は、言説の定める通りに、思惟を宿す身体としての地位を追われる。さらに、その枠組みに抗う言葉、例えば、同性愛も等しく正常だなどという言葉は、その枠組みを揺るがすがゆえに、その枠組みが盤石である限り、それを発した身体を、合理的判断能力をもつ主体性との結びつきから切断する効果をもつ（Butler 1990=1999: 19-29, 1993: 27-55, 1997b=2012: 111-4; 長野 2007: 60-3）。

かくして、バトラーは、パフォーマティヴィティの結果として、第一に、事実確認的に（コンスタティヴに）語られるべき客体（身体）と、客体に対して超越し客体に関する真理を語る主体（思惟としての精神）の領域が生じていくこと、第二に、客体としての客観的な正しさを根拠に己の内奥に思惟たる精神が宿ると自己定義できる身体とそうではない身体を生み出していくことを、指摘するのだ。

３．メルロ＝ポンティのセクシュアリティ分析への批判からパフォーマティヴィティ論へ

（１）メルロ＝ポンティの実存分析に潜む普遍の偽装

バトラーは、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』でいう身体的実存について、初期の論文「性的イデオロギーと現象学的記述」では、身体の再帰性を示すものとして評している。バトラーによれば、メルロ＝ポンティは、「身体」を「身体的行為体（corporeal agency）」として位置づけることで、「身体」に「再帰性（reflexivity）」を見出しているのだ（Butler [1981] 1989: 89）。

では、メルロ＝ポンティが提示するとされる「行為体」としての「身体」とはいかなるものか。それを論じるには「行為体」が何であるのかを明らかにする必要があるが、バトラーは、この論文では「行為体」自体を定義づけていない。そこで、より明示的に論じられている『ジェンダー・トラブル』に補助線を求めるならば、「行為体」とは、文化・社会的構造から、意味を言い表す能力を付与されると同時に、今度は、その能力を用いることで、自らを生み出した構造の再生産や変容に寄与する者、あるいは作用を指す概念である（Butler 1990=1999: 250-60）。「身体的行為体」という用語もこの線で理解できる。その用語は、メルロ＝ポンティが論じた“歴史的状況との相互媒介的関係性の中で生じる身体的実存”を指すために導入されている。バトラーの理解では、メルロ＝ポンティにおいては、「歴史的に状況づけられている限りで」「受肉した主体」は生まれ、その主体の「具体的行為」が「自然のセクシュアリティ」に「特殊な歴史的表現」を与えるのである（Butler [1981] 1989: 90）。

ただし、バトラーはメルロ＝ポンティのセクシュアリティ分析に残る“歴史に先立つ／外在する自然”という措定を問題視する（Butler [1981] 1989: 90-1）。そのために、偶発事に「道理」を読み込んでいく実存の能動性を強調したメルロ＝ポンティ [2] のごとく、「身体的行為体」が実存の資格で世界を積極的に構成していく様を論じる代わりに、“実存が受動的位置に立たされざるをえない歴史的状況”に埋め込まれている政治的力学に焦点を当てていく。バトラーは、メルロ＝ポンティのセクシュアリティ分析に残る“自然主義と女性差別的異性愛主義の結合”を批判し、最終的には、“実存の誕生の条件”に位置する“文化に媒介された権力関係”を理論化するべきだと結論づけるのだ（Butler [1981] 1989: 97-9）。

メルロ＝ポンティは、そのセクシュアリティ論において、シュナイダーと呼ばれる、脳に損傷を負ったある男性の性的不能に関する分析を行っている。その症状にメルロ＝ポンティが見出そうとするのは、経験科学的因果関係ではなく、身体的実存としての変調である。彼が言うには、シュナイダーから「消え失せてしまっているものは、自分の前に性的世界を投射し、色情的状況に自分を置く能力」である。「正常人」であれば、「女性の身体」に「特有の本質」を「視覚」を通して感じ取るという「色情的知覚の……構造」をもっているはずであるのに、彼はこれを欠いているのだ（Merleau-Ponty 1945＝1982: 263）。バトラーに言わせれば、こうした分析自体が、特殊な文化のもとで育まれた「男性的な窃視症の独我論的循環」に基づくのだ（Butler [1981] 1989: 94）。メルロ＝ポンティの誤りは、欲望する主体（男性）／欲望される他者（女性）という関係性が異性愛主義的文化の中で迫られる実存的状況であることを等閑視し、あまつさえ、その関係性において欲望の主体たる地位を割り振られた特殊な実存（異性愛男性のそれ）に身体の普遍的知覚構造を見出してしまったことにある（Butler [1981] 1989: 96-7）。

だから、バトラーは「身体が実存的主題を表現し、演劇化するのであれば、かつ、それらの主題がジェンダーの点で特殊的であり（gender-specific）、そして、完全に歴史化されるものであれば、セクシュアリティは文化的闘争の現場になる」と論文を結ぶことになる（Butler [1981] 1989: 99）。この結論を含む章の小題は「現象学的フェミニズムに向けて」と銘打たれており（Butler [1981] 1989: 97）、欲望の能受の位置をジェンダーにそって配置する歴史的な文化構造に抗う身体的実存に関する現象学的分析が後続する可能性が示唆される。だが、結局、バトラーの分析が向かうのは、実存が埋め込まれているであろう異性愛主義的関係性を再生産する文化構造である。

（２）「身体的実存」のパフォーマティヴィティ論的な読み替え

後続するメルロ＝ポンティ論「パフォーマティヴ・アクトとジェンダーの構成」（Butler 1988＝1995）では、身体的実存は“表現する行為体”として再読されていく [3]。まず、バトラーは「行為」の「現象学理論」の特徴を、「社会的主体」が「あらゆる象徴としての社会的記号を使って、どのように社会的現実を構成するのかを説明しようとする」と一般化する（Butler 1988

＝1995: 58）。その上で、『知覚の現象学』における身体の「身振り」も「社会的記号」を用いての「構成という行為」であると位置づける。いわく、「身体」は「利用可能な歴史的慣習」による「制限」のもとで、「意味を担う」「モノ」として「継続的かつ絶え間なく具体化」していく。それは「社会的な期待に沿った演技」を遂行することで、「生物学的性」の「心理的な相関物」として、「ジェンダー・アイデンティティ」を「意味」づけていくのだと（Butler 1988=1995: 60, 68-9）。かくして、バトラーは、“身体演技が規範を引用することで発揮する意味付与作用”という意味でのパフォーマティヴィティの結果として、客体が属するとされる秩序が真実味を帯びていくのだと論じる。

くわえて、バトラーは「社会的主体」も同様にパフォーマティヴィティの結果であると言う。バトラーによれば、現象学の「構成説」を敷衍すれば、「社会的主体」もまた「構成という行為」の「対象」と考えられる（Butler 1988＝1995: 58）。バトラーが描く演劇論的世界においては、「社会的な演技」は、先立つ主体の意図に発するものではなくむしろ、「脚本」（Butler 1988=1995: 66）に基づいていることで、そのような主体を遡及的に誕生させていくのである。ここでいう主体とは、「身体を持つ自我」（Butler 1988=1995: 67）である。バトラーのこの論から引き出されるのは、“身体として自己を知覚する主体”が、“既定の身体的演技を規範通りに引用すること”の結果として、生み出されていくとの命題である。

バトラーはメルロ＝ポンティ論においても、その後の所論においても、セクシュアリティ・ジェンダーをセックスという自然から演繹する方法論を退け、同時に、身体のあり様を精神作用に還元する主知主義にも主意主義にも与せぬ議論を一貫して展開している（Butler [1981] 1989, 1988=1995, 1990=1999, 1993, 1997a=2001, 1997b＝2012）。「パフォーマティヴ・アクトとジェンダーの構成」（Butler 1988＝1995）では、反基礎付け主義的方法として、知られる客体も知る作用も与件とせず、それらを政治的に生み出されるパフォーマティヴィティの効果として読解するとの選択が明示される。この流れは、言語的なパフォーマティヴィティによって語る主体が構築されるのだと論じていく『ジェンダー・トラブル』（Butler 1990=1999）以降、加速していく。他方で、「反省」する「思惟」を待たずして、身体がいかに感覚を自らに養い自意識として生成していくかという現象学的論点は、否定的にも肯定的にも吟味されず、パフォーマティヴィティ論の傍らでこれに架橋されぬまま放置されている。

４．パフォーマティヴィティ論が置き去りにしたもの、「知る - 身体」としての「私」

（１）ハビトゥス概念から呼びかけ理論へ

バトラーは身体的なパフォーマティヴィティと言語的それを架橋するものに、P. ブルデュがいう「ハビトゥス」を見出す。ハビトゥスとは、社会的儀礼に投入されることで身体に生み出される「感覚」の「構造」のことである。社会的につくられるこの「構造」が、今度は、身体所作、発話、さらには、思考の間に一貫性を生み出し、社会構造に沿った主体を生み出してい

くとされるのであった（Bourdieu 1980=1988: 82-4, 91-2, 105-19）。ブルデュがハビトゥスを感覚の構造であると強調したのとは対照的に、バトラーはそれを「パフォーマティヴィティの暗黙の形態となり、身体レベルで生きられ信じられている引用の連鎖」（Butler 1997a=2001: 240）であると再定位する。2 章で述べたように、バトラーの説明では、特定の言説体制に照らして適切と言いうる言語的カテゴリーの引用によって自己を説明する言葉遣いが、物事を正しく判断する能力のある思惟の宿るところとして、語る身体を、語る主体へと引き上げるのであった。さらに、ブルデュのハビトゥス概念を経ることで、語る主体へと認可されていく身体も語る主体を生む言語的パフォーマティヴィティに符合する形でパフォーマティヴィティを実演すると説明されるのである。つまり、バトラーがここで示すのは、規範に即したパフォーマティヴィティが言語表現と身体表現に分岐しつつ、語る主体を生み出すという一つの目的へと配置されているということである。

むろん、メルロ＝ポンティの“知覚する身体”を“規範的演技を実演する身体”と読み替えた段階で、バトラーにとってこの点は既知であったとも言えるのだが、ともあれ、ブルデュの検討の中で、パフォーマティヴィティという単一の原理を説明項として、言説的意識と身体的感覚の発生を被説明項として提示するバトラーの方法が明示されるのである。この方法自体は、首尾一貫したものであるが、表現、感覚、そして、自己に関する知との間にメルロ＝ポンティが敷いた関係式を、表現の規範的な引用という観点から整序するにとどまり、表現と同時に感覚はいかに身体から湧出するのかという論点は無視されてしまう。

この欠陥が示されるのが、ブルデュを批判する箇所である。バトラーは、表現の引用の連鎖が生み出し／を再生する感覚の構造を指し示すものとして、ハビトゥスを評価するが、ブルデュのその概念化は、表現の脱規範的な引用と相関する感覚の構造の脱規範化を射程においていないと考えている（Butler 1997a=2001: 240）。バトラーは、ハビトゥス概念を、メルロ＝ポンティがいう“身体で生じる思考と表現の同時生成”という観点から読解する可能性を認めつつも、ブルデュが論じ損ねた事態を説明する足がかりとして、Ｌ.アルチュセールの“呼びかけ理論”を選択するのだ（Butler 1997a=2001: 238-9）。

アルチュセールは、社会的名称で呼ばれることで、個人は名が用意する社会的地位に相応しい主体として誕生すると論じる。そして、その誕生の条件に、儀礼への参加を通じて身体が名に相応しい自己を信じていくことをも挙げている（Althusser 1970=1995: 357-62）。これらの点に着目するバトラーが、アルチュセールから導き出そうとする状況は、「パフォーマティヴな呼びかけの誤用の場面」である（Butler 1997a=2001: 238〔改訳〕）。バトラーは、「身体レベルで」の「引用の連鎖」（Butler 1997a=2001: 240）が規範的なそれから不適切な方向に分岐・逸脱していくことのうちに、名が告げ知らせる諸主体の「支配的な社会秩序」を「再意味づけしようとするプロジェクト」の契機を見出すのだ（Butler 1997a=2001: 238）。

（２）「前 - 言説的『私』」と「知る - 身体」としての「私」

バトラーはメルロ＝ポンティではなくアルチュセールに接近した。この理論選択は、身体が己に割り振られた表現の社会的貯蔵庫を利用しつつ別様の表現を探索し、そのことによって言説の秩序に変容をもたらす可能性を論じるためである（Butler 1997a=2001: 239, 252）。しかし、その結果、諸身体の間で生じるであろう相互行為の中で、身体が自己をいかに感じ取り、言語表現への愛着をはぐくむのか、あるいは、それと自己との関係を折衝するのかという主題が論じられずじまいなのである。

ただし、この問題にバトラーが無関心であるわけではない。バトラーが呼びかけ理論に依拠しながら侮辱語とナルシシズムとの関係を論じる箇所には、身体に対する身体による自己知を措定していると読み取ることができる。バトラーが言うには、「〔オカマのような〕侮辱的な名前で呼ばれることで、私は社会的存在になる。……存在を与えてくれる語をある種のナルシシズムが捉えるゆえに、私は自分を侮辱する語を進んで選び取るように導かれる」（Butler 1997b＝2012: 127）。注目するべき点は、バトラーが言説的意識とは別の次元に呼称を希求する自己の感覚を見出している点だ。「名」が「主体」を生み出すのだから、それに先立つナルシシズムを抱く潜在的なものはいまだ「主体」ではない。しかし、それは自己に対する愛着を感受している何者かであるのだ。バトラーはそれが身体的なものであることを否定できないだろう。「引用の連鎖」（Butler 1997a=2001: 240）が生じる所としての身体に焦点を当てるためにであるにせよ、彼女がアルチュセールに依拠した理由は、名と身体的生の不即不離の関係性を指摘するためであったからだ。

では、改めて、ナルシシズムを抱く主体以前の潜在的感受者とはどう概念化すればよいのか。バトラーが少なくとも初期に関心を寄せた『知覚の現象学』のメルロ＝ポンティであれば、「知る - 身体」としての「私の実存」（Merleau-Ponty 1945=1982: 674）であると端的に述べるであろう。さらには、彼であれば、この「私の実存」とは「沈黙のコギト」の別名であると説明することになるだろう。「沈黙のコギト」とは、言語的命題を駆使する「匿名の一般的思惟」（デカルト的コギト）に先立つ、「私による私の体験」（知覚レベルの体験）を指す概念である（Merleau-Ponty 1945＝1982: 662, 665）。

むろん、「前 - 言説的『私』」を否定し、手垢にまみれた「主体」概念に代わるものとして「行為体」概念を推すバトラー（Butler [1981] 1989: 89, 1990＝1999: 251-60〔改訳〕）から見れば、メルロ＝ポンティがいう「沈黙するコギト」など「再帰的なデカルト的自我（reflexive Cartesian ego）」（Butler [1981] 1989: 88）の再来に過ぎないかもしれない。メルロ＝ポンティのいう身体を“演技のレパートリーから規定通りに引用する行為体”と解釈したバトラーの視点（Butler 1988＝1995）からは、それは、「〔身体の〕演技の奥に」あると社会的に措定された「内面的な自我」であり、「ありもしない実体」として退けられるべきもの（Butler 1988＝1995: 69）と判断されるであろうからだ。

しかし、“名で呼ばれることで主体という位置に就くことを欲する感受性”を身体に探るのならば、バトラーには、メルロ＝ポンティがいう「知る - 身体」（Merleau-Ponty 1945=1982: 674）

が文化と権力の連関の真っただ中で生み出される場面を理論化する選択もあったはずだ。それは“文化と権力から自由な主体”という地位に身体を就任させることに禁欲的でありつつ、自己を表現することと自己を知ることが身体の行為として結実する場面をとらえる諸概念を構築する作業へと続いたであろう。バトラーは、異性愛主義が織り込まれた、主体と客体という二元体制が、パフォーマティヴに構築された偶発事であると喝破する。が、偶発事を必然と位置づける引用、その偽装を暴く対抗的引用の成否を左右する項目として“客体たる地位を超越する身体性”がありうることについては吟味していない。その吟味が必然性の政治的偽装に関する分析に資するのであればそれを避ける理由はない。そこで、身体が、他の身体との関わりの中で、どのように、権力関係に裏付けられた／を裏付ける表現と結びつき、自己に対する感覚をもつのかに関する理論構築は必要だ。

次章では、まず『見えるものと見えないもの』（Merleau-Ponty 1964=1989）における交差配列論をもとに、「知る - 身体」としての「私」を脱独我論的に再解釈する。そのことで、諸身体との文化的な関わりの中でしか「知る - 身体」は生じないのだという点を確認する。次いで、侮辱表現に対する感覚が相互行為を行う身体にいかに生じるかに関する試論を行う。これはメルロ＝ポンティの身体論を活用し、バトラーが照準した領域、すなわち異性愛主義文化の権力関係を生きる身体的生を説明する試みである。

５．呼びかけの成否を握る間身体的ナルシシズム

（１）身体的実存の交差配列論に基づく再定位

『知覚の現象学』の主題であった「現象学的身体」は『見えるものと見えないもの』では「感じる身体」「見る身体」と言い換えられ、これと「客観的身体」、すなわち、「感じられる身体」「見られる身体」との関係が考察される（木田 1984: 332）。前者の著作の焦点は、自らが属するべき「《世界》という相互感官的統一」に自らを投げ出す「運動」の最中で「われ……し能う」という意味での「意識」が「身体」に生じることにある（Merleau-Ponty 1945=1982: 235-7）。後者における交差配列とナルシシズムに関する議論では、身体の自己知覚の生成における根源的受動性に焦点が移る。

交差配列とは、“感じるものとして、感じられるものに臨むとき、常に自らも感じられるものの側に立たされる”という“能動性が受動性に根源的に巻き込まれている事態”を言う。交差配列においては、世界に向かって運動する身体は、世界との関係に巻き込まれ、受動的・脱自的にしか、自己に関する感覚を抱くことができない。メルロ＝ポンティが引き合いに出す例は、物に触れる手に別の手で触れるときの経験である。物に触れる私の触る手も、他方の手で触れられることで、物と同様に触られる物の世界の一部たる地位に移動する。「『触れる主体』が触られるものの地位に移り、物の間に降りてくることになり、その結果、触覚は世界のただなかで、いわば物のただなかで起こるようになるのだ」（Merleau-Ponty 1964=1989: 185-6）。身体は常に他者に触れられていることで自己に関する感覚を得ているのだ。この事態が、身体としての

私の根幹にあるとされる。

メルロ＝ポンティはここから独自のナルシシズム観を説明する。やはり、交差配列の絡み合いの中で、見る身体は見えるもの（見られるもの）に自己を見出す。のみならず、見えるものに見返され、それに魅了されている状態、私の能動性が受動性と交じり合っており、「誰が見、誰が見られているのかわからな」くなる状態こそが交差配列におけるナルシシズムの本質である（Merleau-Ponty 1964=1989: 193）。「見えるもの」の「見るもの」への「巻きつき」に、同じように貫かれているナルシスたちの関係性をメルロ＝ポンティは「間身体性」と呼ぶのだ（Merleau-Ponty 1964=1989: 195-6）。

この関係性に秩序を与えるのが「次元」であり、その背景にある「理念」である。「次元」とは「以後それとの対比で他の全ての経験が標定されるようになる或る水準」の名であり、間身体性を統べる「理念」を知らせる具体的事象である。例えば、「次元」は、「ソナタ」を鑑賞できる人にとってはある「小楽節」かもしれないし、フロイト的世界を生きる人にとっては「糞便」かもしれない。この「次元」に「この世界に住み着き、それを支え、それを見えるものにする見えないもの」としての「理念」が凝縮されているのだ（Merleau-Ponty 1964=1989: 209-10, 399）。この点を踏まえて言えば、『知覚の現象学』で主張されたように、「世界」を「ありたいと志向するものへの、力ずくの移行」としての「身体」の相関物である（Merleau-Ponty 1945＝1982: 626, 674）と位置づけるのでは不十分だ。問題は、間身体的関係性の中で、文化的なものである「理念」を、具体的事象である「次元」を通じて手繰り寄せる形で、身体の実存の運動がいかに生じていくかである。

バトラーであれば身体の「社会的な演技」と呼んだもの（Butler 1988＝1995）は、メルロ＝ポンティの現象学的観点からみれば、「実存的身振り」である（Merleau-Ponty 1945=1982: 302）。すなわち、身体が欲する己の在り方の相関物たりうるように世界の構造を組み替えようとする行為それ自体としてある。さらに、言語行為も身振りの一つとして説明される。「呼称」とは「対象を名指すことによって対象に到達したい」という「身体の全体的意識」の「音声的身振り」である。「呼称」は、反省的思惟が「概念的陳述」を発声器官としての身体に託していることの結果であるわけではない。「語や言葉」は「精神的景観」を目指しはするが、まずもって「感情的値」をもつ「実存的身振り」として「思想」を提示するのである（Merleau-Ponty 1945=1982: 295-302）[4]。これに照らせば、あるアイデンティティ・カテゴリーによる自己の説明は、その行為を通して自己を実現したいという身体の感覚に発するのである。

これらを、間身体性の観点から再定位するならば、身体表現であれ、言語表現であれ、それらが実存的身振りとして意味を成すのは、身体が他の身体の中に自己を見出しうる限りにおいてであると言うべきだ。身振りによって自己を感じ取ることは、身振りをする自己をその身振りを振り向ける別の身体が繰り出す身振りの中に感じ取っていることの一環としてである。ある名で自己を呼びたいとの願望ですら、間身体的に説明されるべきこととなる。メルロ＝ポンティが言うには、物に触れる右手に左手で触る場合のように、「私自身の〔声の〕振動を私は内

側から聞く」。同時に「話している他人の息づかいを聞きとり……彼においても、自分の場合と同様に怒号の恐るべき誕生を……目撃するのである」（Merleau-Ponty 1964=1989: 200）。この視点を敷衍すれば、名で自己を呼ぶことは、名で自己が呼ばれることと不可分であり、そして、自分の声はその名を口にする他者の声に重ね合わせられることで、自己の知覚に結びつくのである。

メルロ＝ポンティ自身は間身体的秩序に潜む権力関係を直接には主題にしていない。だが、“理念が次元を通じて間身体性に秩序を付与している”との着想から、バトラーが問題にする異性愛主義的な権力関係を説明することもできる。次節では、同性愛を侮辱する表現が、異性愛主義という理念を支える次元として、身体のナルシシズムを非対称な仕方で方向づけている点、同時に、その表現が間身体的ナルシシズムとの結びつきの中で命脈を保っている点を理論的に示したい。

（2）“呼びかけ理論のバトラー解釈”に対する批判

交差配列論を前提とすれば、ある身体が同性愛嫌悪的主体になる条件は、“決して同性に欲望を感じたことなどない者”として自己を呼びかけるように、他の諸身体の身振りによって動機づけられていることである。つまり、同性愛嫌悪的な文化的レパートリー（例えば、同性愛への嘲り、嫌悪の眼差し、威嚇の姿勢）の中から具体的な他者たちが選択し使用している身振りに、自己の身振りを重ね、同性愛の身体という共通の対象に共通の態度で臨んでいることによって、ある身体は自己を同性愛者ではない者として知覚することができるのである。この状況のもとで、同性愛嫌悪の諸身体は、同性愛の嫌悪の念が、いったい誰のものであったのか分からなくなるほどに、つまり嫌悪の源泉の所在を理解しないまま、安んじて、同性愛嫌悪の主体でいられる。

逆に、自己のセクシュアリティに同性愛を感じとる身体の困難は、自己 - 同一性の感覚を請け負ってくれる「相互感官的統一」としての「世界」が不在であることだ。例えば、昼中街頭で肩を寄せ合う二つの身体に向けられる身振りは、嘲りの声、嫌悪の眼差しである。さらに、物の秩序も愛着するべき自己を保証してくれるものではない。異性愛の身体であれば、利用できた公共施設、私生活の場である住居、安全に歩けた街頭というものが存在しない。こうした状況の中、他の身体との関係、物の配置との関係において、異性愛ではない身体は、自己に対する誇りや敬意の感覚を、喪失させられるように方向づけられるのである。むろん、実存としての身体にこのような方向性を付与するのは、異性愛を本来のセクシュアリティとして設定する理念に向かって調律されている間身体的秩序である。

「オカマ」といった侮辱語がもつ効果も上記の間身体的関係性において身振りがもつ作用の延長線上に位置づけられる。メルロ＝ポンティによれば、――バトラーも承知の通り（Butler 1997a=2001: 239）――、「語るということ」はすなわち「考えること」である（Merleau-Ponty 1945=1982: 298）。「〔思惟による〕表象」があるから「発音」があるのではなく、両者は実存と

して生きる身体の「音声的身振り」として同時生成されるのだ（Merleau-Ponty 1945=1982: 300-1）。この理論を侮辱語に適用してみれば、侮辱語は思惟の事実確認的認識を言語化したものなのではなく、「感情的値」をもつ「実存的身振り」（Merleau-Ponty 1945=1982: 302）なのである。それは、悍ましきものとして他者化[5]される諸身体の範囲を境界画定し、それらの自尊心を破壊しようとする身振りである。そして、『見えるものと見えないもの』の着想（Merleau-Ponty 1964=1989: 209-10）に照らすならば、「オカマ」といった侮辱語は、異性愛主義の「理念」を具現化する「次元」として機能すると言える。そのような語は、ある身体がそれにいかに応答するか次第で価値のある身体として評定されるか否かが決定される試金石として働くからだ。

文化の命じるままに、他者の価値を貶めるための言葉遣いに集合的に身を投じることで、身体は、特定の身体を自らに対して悍ましき他者として確立し、それとの対比において自己の感覚を手に入れるとともに、優越感や嗜虐的感情を共有し、嫌悪に基づく絆を強化することもできる。それこそ、同性愛嫌悪に基づく間身体的ナルシスズムの連帯である。では、侮辱語で呼びかけられる身体、それでもって自分を指し示す身体のナルシシズムはいかに考えるべきか。バトラーは、「存在を与えてくれる語をある種のナルシシズムが捉えるゆえに、私は自分を侮辱する語を進んで選び取るように導かれる」（Butler 1997b＝2012: 127）と答えるのだった。

メルロ＝ポンティの視点から付け加えるのであれば、侮辱される側のナルシシズムも間身体的な実存の運動に基づくものであるということだ。侮辱語で自己を呼ぶ行為とは、身体の実存的身振りであり、それは身体による表現行為であると同時に感情的負荷をもつ意識を自らに生み出していく行為である。さらに、その行為を促し強化する条件は、自らを呼ぶ自らの声に絡みつく他の身体からの呼び声との関係の中で、他者の呼び声と自己の呼び声が不分別になるような事態が生じていることである。例えば、好意を寄せる相手が同性であると感じている身体は、「オカマ」という卑下させる効果のある他者の呼び声に、自分の声を見出すことを余儀なくされる。その状況下で、身体は「オカマ」という語でもって侮辱するべき自己を感じ取るのだ。

この種のナルシシズムは、異性愛主義文化の中で貶められる他者の位置を受容する点で、マゾヒスティックなそれである。バトラーの先の答えも、劣等の存在としてすら生を希求する自虐的なナルシシズムのあり方を示唆する。だが、その論は、侮辱表現の意味を感知する感覚が、他の身体との間身体的な力関係の中で、侮辱される身体にいかに生じ、その自己知へと結実していくかは説明してはいない。さらに、バトラーがいう「パフォーマティヴな呼びかけの誤用の場面」、すなわち、侮辱語に対して対抗的な身体のパフォーマティヴィティが生じうる場面にも補足するべき点がある。バトラーはそのようなパフォーマティヴィティが可能である理由に、「引用の連鎖」には非正統的な引用の契機が含まれていることを挙げるのだった（Butler 1997a=2001: 252）。だが、その連鎖が「再意味づけしようとするプロジェクト」（Butler 1997a=2001: 238）へと結びつくと言うからには、侮辱語が引き起こす自己卑下させる効果を跳ね返すような感覚（例えば、わだかまりから憤りに至るような）がいかに生じるかを説明しなければならない。感知する感覚がなければ、いくら表現が別の仕方で反覆されようとも、その表現は身体に

とっては、有意味なものとしては知覚されがたい物的現象に過ぎない。

バトラーはアルチュセールの呼びかけ理論から、名による呼びかけを身体によるパフォーマティヴィティが裏切っていく様態を導き出そうとする。その理論は、公式的な言説秩序がその理解可能性の枠組みの内部で諸身体に割り振る主体 - 位置を攪乱する身体独自の表現行為を示唆してくれるものとしてバトラーによって評価されている。他方で、表現行為と同時生成的な自己知が身体の感覚へと結実する場面に関してはさらに論じるべき点を残している。メルロ＝ポンティが明らかにしてくれるのは、個々の身体は他の身体との関係性に巻き込まれることで、自己を表現し自己を知るということである。侮辱語が権力関係を生み出す理由は、その語に差別的文化の理念が圧縮されているからであり、その理念に即した形で、間身体的ナルシスズムを不均衡に形成することを促すからである。同時にその理念に対して対抗的な身体の表現が生じるのであるとすれば、やはり、自己を重ね合わせられる他の身体と関わり合う中で、何らかの自己肯定的感覚、例えば、誇りを持つに値する生への確信を、その他者に見出し、かつ、その他者からも同様の眼差しを差し向けられているからなのである。バトラーが論じえていないのは、交差配列的な絡み合いの中で間身体的に生じるナルシシズムの生成過程、すなわち、ある身体が他の身体からの応答を介して感じとる自己に関する感覚であり、その感覚を他の身体に送り返すことで生じうる諸身体のナルシシズムの集合的な発生のあり様である。

６．結語

パフォーマティヴィティに照準し身体を論じるバトラーの理論は、“身体を客体として真理を語る主体”を所与とすることで権力関係の正当化、さらに悪い場合には、隠蔽化を図る基礎付け主義への批判に向けられてきた。その方法は、その種の主体も、権力関係を支え／に支えられる記号体系を引用することで生を得る行為体の一形態であると示すことである。同時に、それらの営み自体が、権力 - 記号の連関の歴史的構造が表現行為の真正な対象に据えることを禁じている身体がありうること、その禁忌の身体を非正統的に表現する行為が既存の構造の変容を引き起こす可能性があることを、規範的な主体化へと誘われる各々の行為体（本稿筆者もその一人だ）に対して、知らしめんとする政治的行為でもある。しかし、もっぱらパフォーマティヴィティ概念をもとに身体を記号の連鎖の一環に位置づければ、その措定自体が、図らずも、知る行為体としての身体を、語りえぬものとして、置き去りにしてしまいかねない。その事態は、主体への選別のために身体を客体にとどめおく基礎付け主義にとっては好都合である。そのうえ、身体を様々に意味づけなおす余地を解放していこうとするバトラーのプロジェクトにも反するものであろう。だからこそ、知るという行為が、表現するという行為とともにいかに間身体的な権力関係の中で生じ、自己を知る身体の生成に結びつくかを探究する方法からパフォーマティヴィティへ接近することも必要なのだ。

【註】

1) 『監獄の誕生』で、M．フーコーは、「霊魂」「主観」「人格」「意識」などの様々な概念が充当され、主体とよぶべきものの内的核に措定される心的なものを「魂」と呼んだ。そして、「魂」はそこに働きかけることで「規律＝訓練」された「身体」を生み出す、近代的な政治テクノロジーの一部であると分析した（Foucault 1975=1977: 33-4）。これを言い換え、バトラーは「魂」は、「身体の消失という転倒した関係において条件づけられ」ることで「出現」し、「主体」として行為すると論じた。ここで言われる「消失」されるべき「身体」とは、「魂」であると社会的に認可されるための条件として特定の身体としてカテゴライズされうることを阻害する身体のあり様のことであり、逆に言えば、「魂」であるためにはやはり特定の身体であることが必要なのである（Butler 1997b=2012: 92=113〔改訳〕）。

2) メルロ＝ポンティは「実存」に「〔己にとっては偶然的である〕事実としての状況を引き受け自己の責任のもとに置き、この状況を変容する運動」を見出してきた（Merleau-Ponty 1945＝1982: 285-6）。

3) S．ストラーは、現象学からのバトラーの離脱について批判を加えている。その論によれば、この離脱の背景には、バトラーが、『知覚の現象学』内の「表現」概念に本質主義（表現に先立ち表現されることをまつ何らかの本質を措定）を誤って見出したことにある（Stoller 2010: 97）。この指摘は半分正しく半分誤っている。シュナイダーに対するメルロ＝ポンティによる分析は、バトラーが示す通り（Butler [1981] 1989: 94）、女性差別的異性愛主義に沿う形で、セックスを原因にセクシュアリティが結果として表現されるはずだとの前提がある（Merleau-Ponty 1945=1982: 260-6）。他方、確かにメルロ＝ポンティが実存と表現の関係を論じるときに、反本質主義的に表現を位置づけようとしている点も事実だ。メルロ＝ポンティは実存と表現は一体不可分であり、先だって存在する本質としての実存を、表現が後から外側に表出していくとの説を取らない（Merleau-Ponty 1945=1982: 279-80）。ただ、ストラーが現象学とパフォーマティヴィティ論を架橋するための具体的指針を示しているわけではない。本研究は、メルロ＝ポンティの間身体性に着目し、パフォーマティヴィティと身体的実存の関係を説明することを試みている。

4) メルロ＝ポンティが言うには、世界に関与しようとする意識としての身体にとって、「名称」は「色彩や形と同じ資格で対象のなかに宿る」ものである。すなわち、あらんと欲する自己へと移行しようとする身体的実存にとっては、対象が眼差そうとする眼に己の色を与えるように、そして、対象が触れようとする手に輪郭と肌触りを与えるように、対象は声を発声せんとする器官に対して自らがどのような音響的存在であるのかを知らせるものとして感知される（Merleau-Ponty 1945=1982: 295）。

5) バトラーが言うには「存続可能な主体の領域」の産出は「存続不可能な（非）主体（(un)subject）」の産出を伴う。そのような体制において後者は「悍ましきもの（abject）」と位置づけられる（Butler [1991]1993=1996: 123）。本稿でいう「悍ましき他者」とは、「主体」に対し「悍ましきまもの」として位置づけられる「（非）主体」である。

【文献】

Althusser, L., 1995, *Sur la reproduction*, Paris: Presses Universitaires de France. （2005，西川長夫・伊吹浩一・

大中一彌・今野晃・山家歩訳『再生産について』平凡社.）

Bourdieu, P. 1980, *Le sens pratique*, Paris: Minuit. （1988，今村仁司・港道隆訳『実践感覚 1』みすず書房.）

Butler, J., [1981] 1989, “Sexual Ideology and Phenomenological Description,” Allen, J. and Y. I. Marion, eds., *The Thinking Muse: Feminism and Modern French Philosophy*, Bloomington: Indiana University Press, 85-100.

————,1988,“Performative Acts and Gender Constitution: An Essay in Phenomenology and Feminist Theory,” *Theatre Journal*, 40(4): 519-31. （1995，吉川純子訳「パフォーマティヴ・アクトとジェンダーの構成」『シアターアーツ』2(3): 58-73.）

————, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York&London: Routledge. （1999，竹村和子訳『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.）

————, [1991] 1993, “Imitation and Gender Insubordination,” Henry Abelobe, Michele A. Barale and David M. Halperin eds., *The Lesbian and Gay Studies Readers*, New York&London: Routledge. （1996，杉浦悦子訳「模倣とジェンダーへの抵抗」『imago』7（6）, 116-35.）

————, 1993, *Bodies That Matter: on the Discursive Limits of “Sex”*, New York&London: Routledge.

————, 1997a, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York: Routledge.（2004，竹村和子訳『触発する言葉――言語・権力・行為体』岩波書店.）

————, 1997b, *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, Stanford: Stanford University Press.（2012，佐藤嘉幸・清水和子訳『権力の心的生――主体化＝服従化に関する諸理論』月曜社.）

Descartes, R., 1642, *Mediationes de prima philosophia*, Amsterdam: Apud Ludovicum Elzevirium. （2006，山田弘明訳『省察』筑摩書店.）

Foucault, M., 1975, *Surveiller et punir: maissance de la prison*, Paris: Gallimard. （1977，田村俶訳『監獄の誕生――監視と処罰』新潮社.）

木田元，1984,『メルロ＝ポンティの思想』岩波書店.

Merleau-Ponty, M., 1945, *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard. （1982，中島盛夫訳『知覚の現象学』法政大学出版局.）

————, 1964, *Le visible et l'invisible*, Paris: Gallimard.（1989，滝浦静雄・木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房.）

長野慎一, 2007,「主体・他者・残余――バトラーにおけるメランコリーをめぐって」『三田社会学』12: 60-73.

Stoller, S., 2010, “Expressivity and Performativity: Merleau-Ponty and Butler,” *Springer Science+Business Media* B.V., 2010, 97-110.

（ながの　しんいち　東京理科大学）